研究ノート

肥後国菊池における中世城館の再検討

阿南亨

【一】はじめに

菊池は熊本県北部を流れる菊池川中流域に位置し、肥後国守護を代々つとめた豪族菊池氏の本拠であった。菊池氏は鎌倉時代末から南北朝時代にかけて宮方につかえ、九州内の武家方勢力と争いをくりひろげたことでも知られる。そのため菊池一帯には城館が多く造られ、現在は菊池神社となっている本城「守山城」を囲うように配置された山城やとりでを、江戸時代のころから特に「十八外城」と呼びならわしてきたが、実際はもっと多くの城が存在したものと考えられる。これら一群の城館は場所こそ比定されているが、その真偽、城域の確定や規模などはまだ充分に究明されているとは云いがたい。

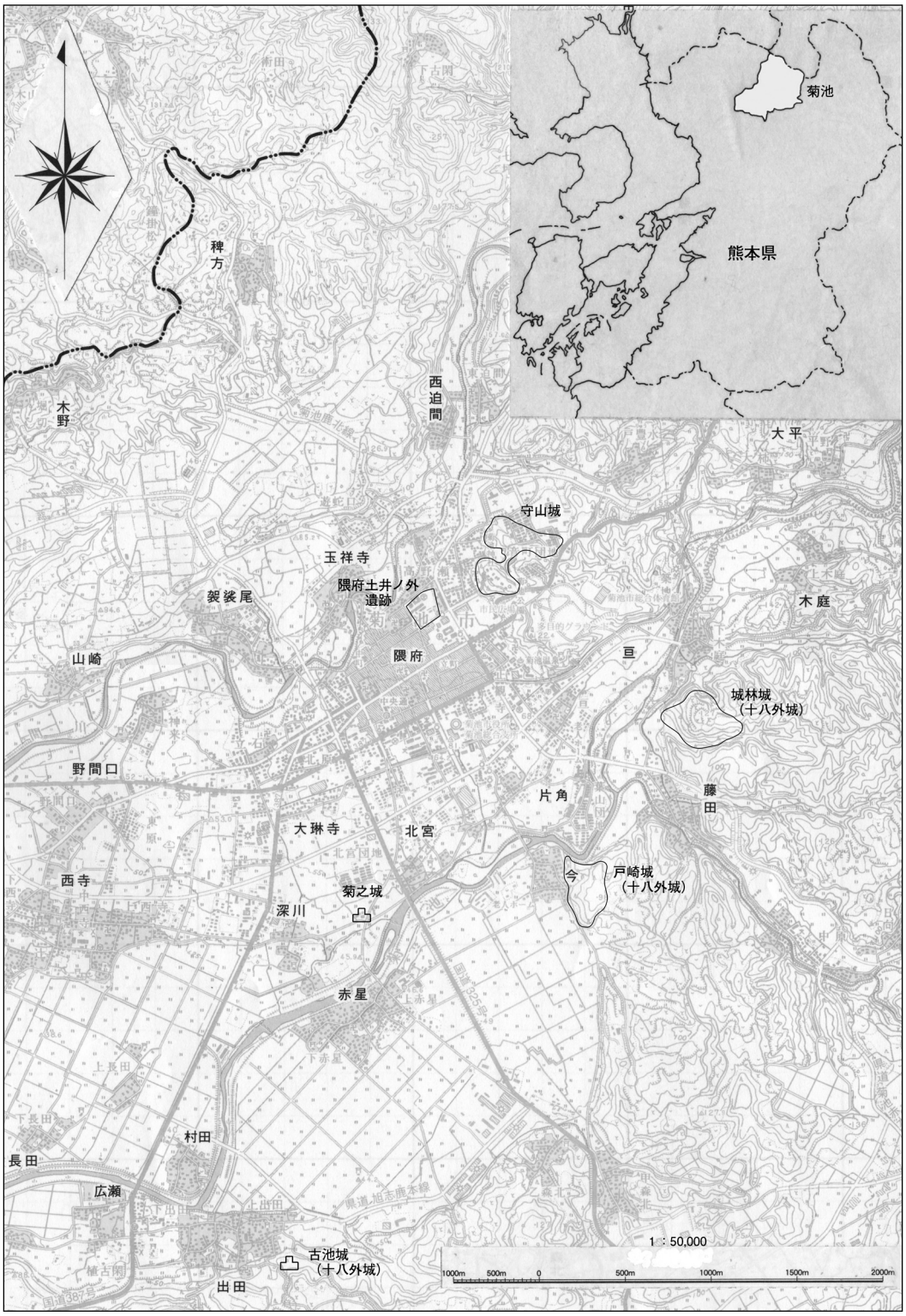
近年、菊池市隈府市街地内の県立菊池高等学校の建て替えに際し、熊本県教育委員会が発掘調査を実施しており、堀を持つ居館跡が確認された。また平成二三年度に菊池市教育委員会が「十八外城」のひとつで、「守山城」へ移転前の本城と伝えられている「菊之城」の確認調査を実施し、遺構、遺物が確認されている。これにより菊池に所在する中世城館は少しずつではあるが、解明にむけてすすんでいくのではないかと思われる。しかしこれまでの文献資料、考古学調査の成果などを受けての総合的な研究は盛んであるとは云えない。これは既存の文献資料に限りがあると同時に、発掘調査による考古学的検証が制約されているためであり、全国的に展開されている中世城館研究の成果に、追いついていない状況である。そこで本稿では、近年の隈府土井ノ外遺跡の発掘調査、「菊之城」跡の確認調査の成果や文献資料をもとに、菊池における中世城館の概要をまとめて、再検討をおこなってみたい。なお、本稿では軍事拠点、支配拠点などを総称して「城館」と呼称するが、平野部に築かれた軍事性が弱い館的な性格を持つと想定されるものを「居館」と呼ぶ。概念としては異論もあるかもしれないが、考察するうえでごく単純に区別して使いたい。また城館名については複数の通称があるため、混乱を避けるために資料中の名称を引用する場合をのぞいて、指定文化財として登録された名称を使用する。

【二】中世城館関連遺跡の概要

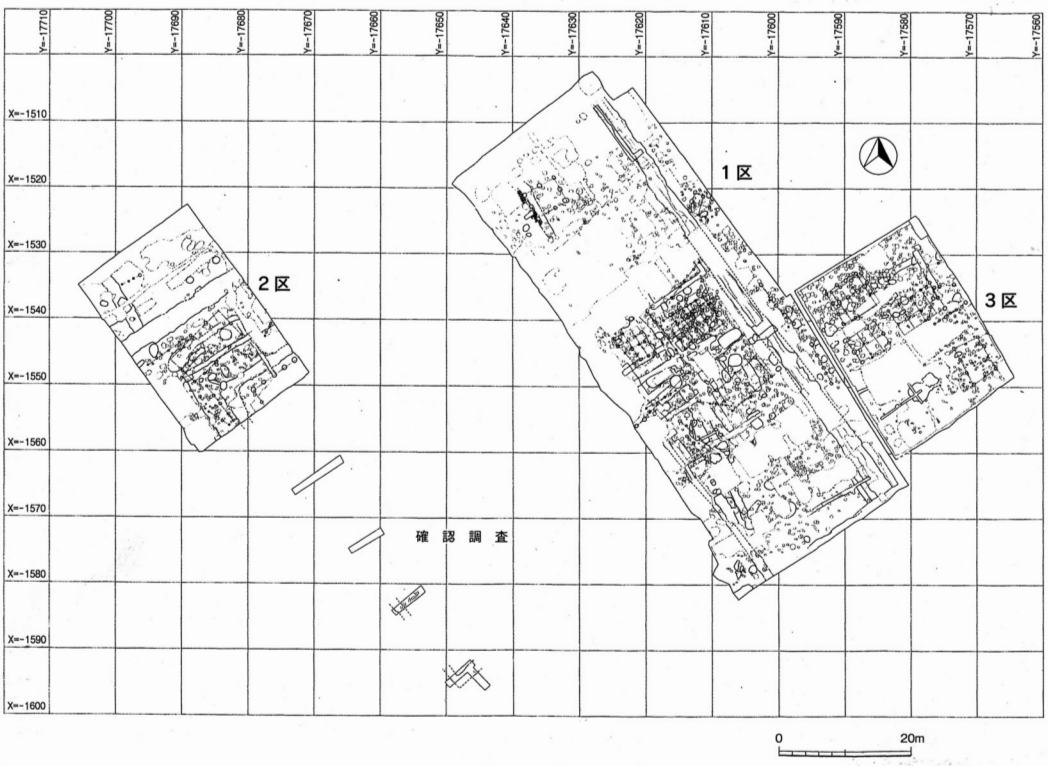
前述したように、菊池において中世の城館は多く知られている。多くが丘陵や山地を利用した山城やとりでであるが、平野部に築かれた居館と推測されているものも存在している。このうち二ヶ所で近年発掘調査が実施されており、その概要を紹介してみたい。

（一）隈府土井ノ外遺跡（菊池市隈府土井ノ外）

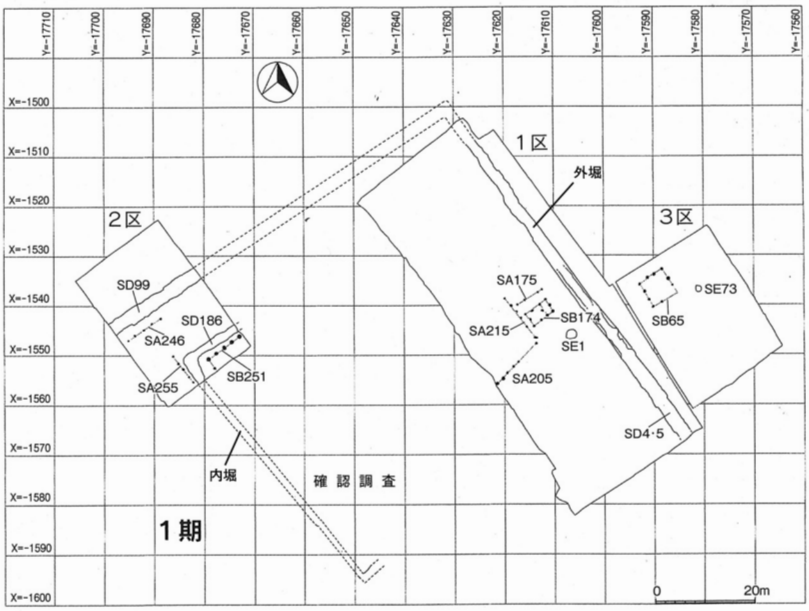
平成十七、十八年度に県教育委員会により発掘調査が実施され、二重の堀を持つ方形の規格の居館であることが確認されている。外側の堀は幅二・六m程度、深さ一・六～二・一m程度で、九十～一〇〇m四方の



第１図　隈府周辺中世城館関連史跡



第２図　隈府土井ノ外遺跡遺構配置図（S = 1/1500）



第３図　隈府土井ノ外遺跡居館建造時遺構配置図（S = 1/2000）

規模を持つと推測される。内側の堀は北西隅が検出され、幅〇．七二ｍ、深さ一．七二ｍを測る。さらに確認調査で南西隅が検出され、外側の堀と併行し、北西⇔南東方向に約五九ｍの規模をもつことがわかった。この二条の大型の堀により区画された敷地内に、多くの掘立柱建物や柵列が検出され、井戸、土器だまりなどもみとめられた。この堀は現在の市

街地内の道路とほぼ併行しており、隈府の街並が当時の区割りをとどめていると推測される。

遺構内出土遺物から、遺跡の時期は三期に分かれ、十四世紀後半から十五世紀前半にかけて存続したものと考えられる。この時期は十五代武光、十六代武政、十七代武朝、十八代兼朝、十九代持朝が惣領であり、九州における宮方の中心であった武光の時代から、宮方の劣勢、さらに南北朝の統一、守護職の地位は保持しつつも勢力が衰退していく時期にあたる。最も古い一期は十四世紀後半から末ごろと考えられるが、二重の堀はこの時期から造られており、武光から武朝にかけて南北朝の争乱の時期は、すでに居館としての規格が確立していたことが判明した。

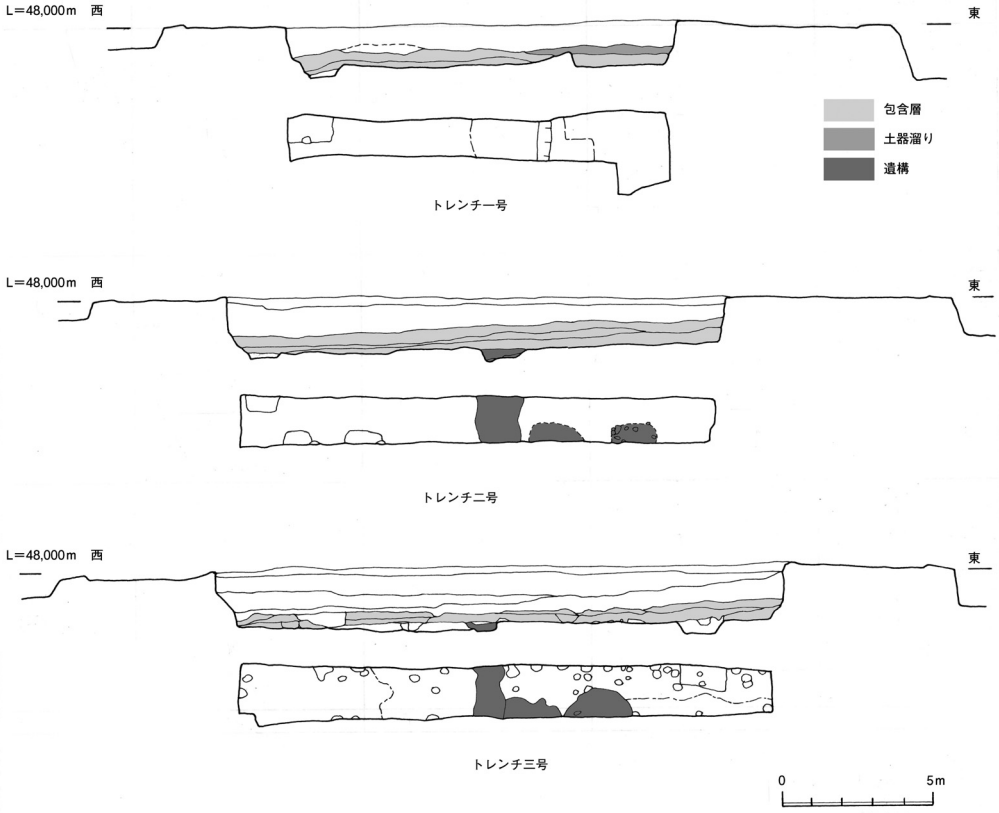
この遺跡については「十八外城」にはあげられていないが、埋蔵文化財包蔵地として「菊池氏館跡」との遺跡名がつけられており（熊本県教育委員会編 一九九四）、守護町隈府に所在することから、菊池氏の惣領屋敷であった可能性が指摘されていた。しかし発掘調査の結果、外堀の規模が九十～一〇〇mと、同様に守護であった大友氏、大内氏の館跡と比較すると不充分であり、庭園などの遺構も見つからなかったこと、また大友氏、大内氏らの守護町は居館を中心とした町づくりがなされていることに対して、土井ノ外遺跡は隈府の中心ではないことから、報告書では「菊池氏館跡」とするには無理があると判断している（熊本県教育委員会編 二〇〇九）。だが「大友氏館」は二町規模に整備拡張され庭園が配置されたのは十六世紀後半と考えられ、「大内氏館」は建造当初から東西一二五m、南北一六〇m程度の規模をもっていたが、最初に造られたのは十五世紀中ごろである。つまり「大友氏館」とは二世紀もの時期差があり、「大内氏館」とは最大で一世紀近い時期差があることになる。両氏の館との規格の違いを根拠に、土井ノ外遺跡の居館が守護職の館とは判断できないと解釈するには疑問がある。その一方、阿蘇大宮司氏居館に比定されている二本木前遺跡では、一二世紀後半にはすでに一町四方の方形の規格を持つ居館が造営されている（熊本県教育委員会編 一九九八）など、中世の居館に関する様相は単純ではない。今後は広域的、継続的に調査をおこなって成果を蓄積し、慎重に比較検討してみる必要があるだろう。

土井ノ外遺跡の東の丘陵字城山には、本城と考えられる「守山城」が所在している。「雲上城」「隈府城」などの別称があり、明治三年、宮方の武将として菊池氏の功績が顕彰されて、本城比定地に菊池神社が創建された。その際の地形改変や近年の道路掘削などによって原地形は様相を変え、土塁や堀などが一部残存するのみであるが、かつては峻厳な丘陵を利用した防御施設がめぐっていたことが推測される。江戸時代に著された文献によれば、十六代武政により築城されたとあるが、はっきりとした根拠はない。発掘などによる検証はなされていないが、現在でものこる周辺の字名や通説などから、本城であることは確実だと思われる。土井ノ外遺跡の事例から、館としての機能を有した居館は確実に存在したものであり、「守山城」は、詰城としての役割を持っていたことも考えられる。

（二）菊之城　（菊池市北宮城の堀）

「菊之城」も「十八外城」のひとつに数えられているが、実際は「守山城」へ移る前の居館であったと考えられ、「深川城」などとも呼ばれている。延久二（一〇七〇）年、初代則隆が築いたと伝えられる。立地としては、菊池川から一段高い平野部の南端に位置し、菊池川を南に見下ろす。昭和五〇年代に著された『菊池市史』上巻に掲載されている古い写真を見

第４図　菊之城確認調査トレンチ配置図（S = 1/3000）



第５図　菊之城トレンチ平面図、南北断面図（S = 1/300）

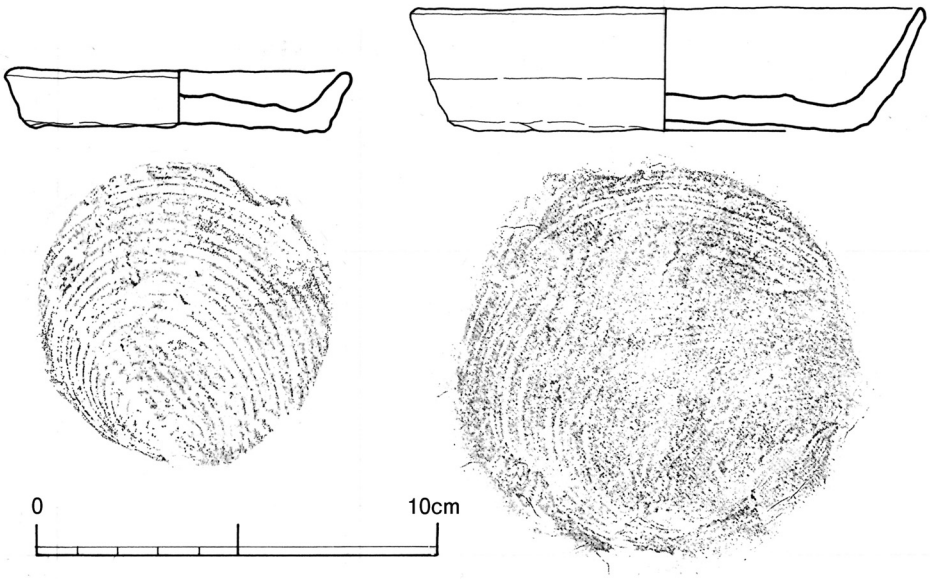
ても、あたりには人家もなく、平野部に築かれたことがわかる（菊池市史編さん委員会編一九八二）。主体部と推測される区画は四周よりも一段高く、階段状の地形を利用したと思われる。主体部はⅠ郭とⅡ郭に分かれ、Ⅰ郭は東西二六～二八m、南北四一m、北から東にかけてかぎ形の堀が囲う。Ⅱ郭は東西三四～四二m、南北六二m、西側に堀がのこり、南側にはⅠ、Ⅱ郭共通の堀がのこる。低い丘陵地へつづく北側には堀はないが、方形の規格を持つ居館と推測される。ただし後世の造成を受けて、原地形が変化している可能性がある。かつて耕作中に青磁片が出土したと伝えられ、周辺から土師器片などを表採することができる。

この地を本拠とした理由として、陸上交通や菊池川の水運に目をつけたものとする説が有力である。河川から約三〇〇m離れているだけであり、付近には船着場もあったと考えられている。また水田経営の要に位置することも想定される。

平成二三年度に菊池市教育委員会で確認調査を実施し、主体部であるⅠ郭に東西方向のトレンチ三基を設置した。

【トレンチ一号】

地表面より約〇．七～〇．九mの深さから遺物の包含層が存在し、一部で約一．五mの深さから遺構検出面が確認され、土器だまりも検出された。遺物は土師器坏、小皿が大量に出土し、この他少量の白磁碗片、龍泉窯系青磁碗、陶質系擂鉢片、須恵器片、瓦器碗などが出土している。坏は口径一二．五cm、器高二．七～三．二cmのものが主体を占める。小皿は口径七．〇～七．八cm、器高一．四～一．八cmのものが主体を占める。見込みはナデにより凹凸を消すものが大半を占め、立ち上がりは強い回転ナデにより、深くくぼむ。底部はいずれも糸切り技法により切り離され、板状圧痕、指頭押圧痕がみとめられる。



第６図　「菊之城」出土土器（S = 1/3）

【トレンチ二号】

地表面より約〇．九～一．一mの深さから遺物の包含層が存在し、土坑、溝、炭化物集中部、礫集中部などの遺構が検出された。遺物は土師器坏、小皿が大量に出土し、この他少量の白磁碗片、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗片、陶器片、須恵器片、磁器染付碗片などが出土している。土師器については小片が多かったが、小皿は口径八．七cm、器高一．〇cm前後のものが主体であると推測される。見込みはナデにより凹凸を消すものが大半を占め、立ち上がりは強い回転ナデにより、深くくぼむ。底部はいずれも糸切り技法により切り離され、板状圧痕、指頭押圧痕がみとめられる。

【トレンチ三号】

地表面より約〇．八～一．六mの深さから遺物の包含層が存在し、土坑、溝、ピットなどの遺構が検出された。遺物は土師器坏、小皿が大量に出土し、この他少量の白磁碗底部片、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗片、陶器片などが出土している。坏は口径一一．二cm、器高二．八～三．五cmのものが主体を占める。小皿は口径七．〇～八．五cm、器高一．〇～二．八cmのものが主体を占める。見込みはナデにより凹凸を消すものが大半を占め、立ち上がりは強い回転ナデにより、深くくぼむ。底部はいずれも糸切り技法により切り離され、板状圧痕、指頭押圧痕がみとめられる。

トレンチ調査の結果は以上である。まず遺構として、溝やピットの存在から建物があったことが推測されるが、規模などは不明である。【トレンチ一号】で検出された土器だまりは、祭祀をおこなった可能性がうかがえる。トレンチ全体の平面状況から、このI郭は【トレンチ一号】と【トレンチ二号】の間で遺構の配置が変わるものと思われ、【トレンチ一号】の東側は祭祀を行った区域、【トレンチ二・三号】で検出した浅い溝は南北方向の区画溝で、この溝を境にして内外に掘立柱建物が存在したものと推測される。遺物包含層は堀を掘り下げた際の土砂を盛って、城館郭を構築するために整地したものととらえられる。

さらに出土遺物の特徴として土師器坏、小皿が主体であることがあげられる。出土した土師器坏と小皿を観察すると、底部にヘラ切りはみとめられておらず、糸切り技法により切り離されており、法量と調整から、多くが十三世紀第2四半期の範疇と考えられる。また磁器の型式とも矛盾しない。調査後の整理作業がすすんでいないが、現時点でこの時期以外の土器はほとんど出土していないことが指摘される。

【三】文献からみる菊池の城館

つづいて文献でみることができる菊池の城館について考えてみたい。まずは近世に著された文献から、菊池の記述を取りあげてみる。

〔資料一〕（「菊池風土記」『肥後文献叢書』第五巻）

菊の城　一　左近将監藤原則隆公肥後を賜り延久二年七月十五日此地に下向有て同郡深川村に城を築き是を菊の城と称す十五武光公迄此所に居城今深川境北宮の田の中に一丁余の畠に高く四方堀にて石垣築き廻したる所有り今に天守跡といふ（後略）

雲上城　一　高野瀬村正観寺村両所の交に在り又守山の城ともいふ今隈府の城といふは是也菊池十六代武政公南朝の正平二十二年に是を築く（後略）

〔資料二〕（「古城考」菊池郡『肥後文献叢書』第三巻）

隈府古城　無双の要害也、守山の城共云、世に隈府の城と唱れ共、

高野瀬村正観寺村の内也、（中略）菊池十六代肥後守武政築之住居す、先祖則隆より武光まで、十六代は深川菊の城に在居也、（後略）

菊池古城　深川村の北にあり、雲上の城と云、菊池氏祖太夫将監則隆、延久二年下向有之、当城を築て居す、（中略）延久二年より應安六年迄三百余年在城、元祖則隆より十五代に至る、武光の子武政、城を守山に築て移ると云。

〔資料三〕（『肥後國志』菊池郡 河原手永・深川手永）

隈府城跡　當城ハ山城也守山ト云（中略）菊池家傳曰當城ハ菊池家十六代肥後守武政築之當郡深川村菊ノ城ヨリ移居ス（後略）

菊ノ城跡　深川村ノ北ニアリ菊池氏ノ祖大夫将監則隆延久二年下向アリテ築當城（中略）菊池十五代在城也武光ノ子武政城ヲ守山に築テ移ルト云（後略）

これらの文献は菊池氏が途絶してから数百年たってから著されたもので、「菊の城」について「四方堀にて石垣築き廻したる所有り今に天守跡といふ」〔資料一〕と述べるなど、後世の見解がまざっている箇所もあり、当時のことについては伝聞にたよる部分も多いと思われるが、少なくとも当時の菊池氏の城館についての通説を知ることができる。

記されていることはほぼ同じ内容で、延久二（一〇七〇）年に初代則隆が「菊之城」を築いたことは同一で、正平二十二（一三六七）年に武政が「守山城」へ移した〔資料一〕、もしくは應安六（一三七三）年まで在城したと記されている〔資料二〕。この年代の根拠はわからないが、当初深川にあった本城が、ある時期から守山へ移ったと伝えられていたことがわかる。

つづいて中世の資料をみてみたい。菊池に関連する城館の記述は少なく限定的であるが、当時の様相を探ってみたい。

〔資料四〕　年月欠　恵良（阿蘇）惟澄申状追書写

（「阿蘇家文書（上）一三〇」『大日本古文書』）

惟澄此間合戦之次第、同注進候、此外肥後国菊池本城、当時合志入替武士令楯籠、去十五日、武光令発向、追落外城焼払、打取兇徒廿余人了、同十六日、追落隈部城、（後略）

〔資料五〕　正平五年三月二〇日付恵良惟澄軍忠状

（「阿蘇家文書（上）一三一」『大日本古文書』）

（正平三年十二月）去十日馳越菊池、同十二日酉刻押寄、兇徒合志能登守幸隆所楯籠之菊池陣城、始合戦六ヶ日夜致軍功畢、（後略）

〔資料六〕　永徳元年七月日深堀時久軍忠状

（「深堀文書十七」『熊本懸史料』中世編第五）

（前略）同（永徳元年）五月十二日、菊池陣城令御共畢、同六月十八日、自坂井御陣、隈部松尾御陣令御共、同廿二日、隈部城没落畢、（後略）

〔資料七〕　永徳元年九月日付深堀時弘軍忠状

（「深堀文書十九」『熊本懸史料』中世編第五）

（前略）同（永徳元年）十二日、被（置）菊池館城之間、於当城仁致宿直之處、同六月十八日、被召隈□（部か？）城攻陣之間、日夜致合戦之刻、同二十二日夜子刻武興（武朝）巳下兇徒（等）（令）没落訖、（後略）

〔資料八〕　至徳元年九月日付安富了心軍忠状

（「深江文書二五」『熊本懸史料』中世編第五）

同（永徳元年）六月二十二日、菊池次郎武朝要害熊耳城没落（後略）

〔資料九〕　康暦元年七月十七日付今川了俊書状
（「阿蘇家文書（寫）第七」『大日本古文書』）
（前略）その上菊池事ハ、陣の城、くま（隈）目の城、木野城なと、
（後略）

〔資料四・五〕は、正平三（一三四八）年、武家方合志幸隆によって占拠されていた「菊池本城」と「隈部城」を、武光ら宮方が奪回したと阿蘇惟澄が征西府へ報じたもので、同一の城攻めが記録されているようである。城館としては「菊池本城」〔資料四〕、「菊池陣城」〔資料五〕と記されており、「菊池本城」＝「菊池陣城」ととらえることができるだろう。この本城は否定する根拠がないため、〔資料一～三〕で延べられている通説のとおり、深川に所在したと考えておく。ただし〔資料四〕では「隈府城」が外城とは区別されて、他の城館とはあつかいが異なることがうかがえる。

時代が三〇年ほど下った永徳元（一三八一）年の〔資料六～八〕は、惣領武朝がたてこもっていた城館が落城したことを記していると思われる。〔資料六・七〕ではそれぞれ「菊池陣城」「菊池館城」と記述されており、これが正平年間の本城と同一のものかを考えてみたい。通説ではこの時期はすでに「守山城」へ本城は移っているので、これに従えば「菊池館城」と呼ばれる城館が別に存在したことになる。「菊地館城」の記述から、この城館が館としての性格をもっていたことがうかがえるが、菊池と呼称する城館がこれまで見当たらないことを考えれば、本城であった深川の「菊之城」がこれにあたるのではないかと思われる。防御機能の問題は別として「菊之城」は依然城館としてのこされたのか、あるいは通説とは異なり、まだ本城は移転していなかったのかもしれない。これら資料とは別に、武光から武朝の代にかけて武家方から九州探題を任ぜられた今川了俊は、康暦元（一三七九）年の〔資料九〕中で、菊池の諸城を「陣の城、くま目（部）の城」と記している。「陣の城」は〔資料五〕の「菊池陣城」と同一と思われ、「くま目（部）の城」は「隈府城」と解釈することができるだろう。

さらに〔資料六～八〕には「隈部城」「熊耳城」が記述されている。同一の城攻めが記されていると考えられることから、「隈部城」〔資料六・七〕と「熊耳城」〔資料八〕は、呼称は違うが同一の城館をさしていると推測される。要害の城と記されている立地状況、十五代武光の墓所が所在する菩提寺が現在の菊池神社の下に位置する熊耳山正観寺と呼ばれていることから、この「隈部城（熊耳城）」は菊池本城に比定されている「守山城」であることは間違いないだろう。

これらの資料から、正平三年～永徳元年にかけて、本城と認識される城館と「隈部城」とが存在していたことがわかる。

一方、正平年間以前について、以下の資料がある。

〔資料十〕　年月日不詳　小代光信軍忠状
（「詫磨文書二四五」『熊本懸史料』中世編第五）
建武三年正月八日属大宰府討手堀三郎入道殿、押寄菊池山城太手令追落武敏以下兇徒等畢、（後略）

〔資料十一〕　建武五年四月十八日付　詫磨貞政軍忠状
（「詫磨文書八一」『熊本懸史料』中世編第五）
建武三年正月八日菊池山城之合戦時、致軍忠追落候畢、（後略）

〔資料十二〕　暦應三年三月付　詫磨宗直軍忠状案
（「詫磨文書八六」『熊本懸史料』中世編第五）

一．同（建武四）年八月、菊池渡山合戦之時、（後略）

〔資料十・十一〕には、建武三（一三三六）年正月に「菊地山城」が武家方に攻められたことが記されている。文中の武敏は十三代武重の弟にあたり、惣領にかわって菊池の留守をあずかっていた人物である。武敏は建武三年の三月に九州の宮方の勢力を率いて、博多の多々良浜で九州落ちをした足利尊氏と合戦をしているが、前年に大宰府を陥落させ、有智山城で親武時のかたき少弐貞経を攻めて自害させるなどめまぐるしく転戦しており、この「菊池山城」の落城もこの時期の緊迫した情勢を示すものであろう。

これらの資料により、正平年間より十五年ほど前に「菊池山城」が存在していたことがわかる。深川は立地条件から山城とは考えられないため、他の城館をさすと思われる。また建武四年八月に菊池勢が詫麻宗直と合戦した「菊池渡山」〔資料十二〕も、隈府の東隣の「亘」に比定できることから、守山一帯は「菊之城」の詰城であり、「守山城（隈部城）」の前身としてすでに機能したとの説がある（青木一九九六）。「菊地山城」には武敏が入城しているが、多々良浜の合戦以降、菊池は周辺の武家方に攻められ、武敏は惣領武重の帰還まで各地の山城やとりでを転戦した模様である。しかし数万の九州宮方の兵を率いて尊氏と戦った武敏が、その直前に本城を陥されるほどの大敗を喫していれば、このような大戦に出る余裕などなかったのではないかと考えられる。このことからも〔資料十・十一〕に記載されている「菊池山城」は、本城ではなかったことが推測される。

【四】考察

以上、菊池の中世城館について、発掘調査の成果と文献資料をあげてみた。全体の流れとして、まずは当初の本城とされる深川の「菊之城」は、〔資料一～三〕によれば延久二（一〇七〇）年に初代則隆により築かれたとされる。則隆の出自自体諸説があり、実証がむずかしいが、このころを起源とすると考えてよいだろう。深川に築かれた理由として、河川、陸上交通、また水田経営の要衝地をおさえる意味合いが強かったのではないかと推測される。「菊之城」はその後、立地条件から防御機能の弱い惣領屋敷として存続したと思われるが、現地形から堀の存在がうかがえる。阿蘇大宮司氏居館跡に比定されている二本木前遺跡にみられるように、肥後においては居館は十二世紀後半には出現していた可能性が示されているが、「菊之城」が通説どおり延久年間の築造だとすれば、これよりもかなり先行する。当初から方形の規格の居館がこの場所に築かれていたかどうかは、今後の検討が必要であろう。

〔資料十・十一〕から、建武三（一三三六）年には「菊地山城」が存在したことがわかり、これが「守山城」の前身の可能性がある。ただし「菊之城」の詰城であったかどうかは不明である。〔資料四・五〕には正平三（一三四八）年に本城が存在していたことが記されている。これは深川に所在した「菊之城」とみてよいだろうが、武家方に占拠されていた本城を奪回した際、本拠を防衛する必要にかられて、本城機能を「守山城」へ移した可能性がある。しかし確認調査による出土遺物は十三世紀後半の様相を持つものが集中をしており、本城が移ったと伝えられる時期より一世紀近く古く、その後「菊之城」が存続したことを明確に示すことはむずかしい。ただしこれは確認調査の結果によるものであり、このことを以って「菊之城」の最終段階がこの時期であったと安易に断定する

世紀	文献資料							発掘調査成果		惣領	備考
	記事年号（記事内の年号を表示）	菊之城			守山城			菊之城	隈府土井ノ外遺跡		
		推定存続期間	資料中城名	資料名	推定存続期間	資料中城名	資料名	出土遺物から推測する存続期間			
11世紀	延久２（1070）年７月15日	菊之城	菊の城	〔資料１〕『菊池風土記』							
	延久２年		菊池古城（雲上城） 菊ノ城	〔資料２〕『古城考』 〔資料３〕『肥後國志』						則隆	延久２年、初代則隆、深川に築城？
12世紀											源平の争乱。 鎌倉幕府のはじまり。
13世紀					守山城					武房	文中11（1274）年、文永の役。 弘安４（1281）年、弘安の役。
14世紀										武時	
	建武３（1336）年正月８日					菊池山城	〔資料10〕小代光信軍忠状 〔資料11〕詫磨貞政軍忠状			武重	元弘３（1333）年、武房、九州探題を襲い、討死。 鎌倉幕府滅亡。建武の親政。 南北朝の対立。 延元元（1336）年、多々良浜の戦い。
	建武４（1337）年８月					菊池渡山	〔資料12〕託磨宗直軍忠状			武士	
	正平３（1348）年		菊池本城	〔資料４〕恵良（阿蘇）惟澄申状追書写		隈府城	〔資料４〕恵良（阿蘇）惟澄申状追書写				
	正平３年12月12日		菊池陣城	〔資料５〕恵良惟澄軍忠状 このころ、本城機能は守山城へ移転か？						武光	正平３年、懐良親王、菊池に入府。 このころ征西府、大宰府に移される。宮方、最盛期。
	正平22（1367）年					雲王城（守山の城）	〔資料１〕『菊池風土記』		Ⅰ期	武政	今川了俊、鎮西探題となる。 文中元年（1372）年、懐良親王、武光、大宰府撤退。
	康暦元（1379）年７月17日		陣の城	〔資料９〕今川了俊書状		くま目の城	〔資料９〕今川了俊書状				
	永徳元（1381）年５月12日		菊池陣城	〔資料６〕深堀時久軍忠状							
	永徳元年６月22日					隈府城 隈□（部か？）城 熊耳城	〔資料６〕深堀時久軍忠状 〔資料７〕深堀時弘軍忠状 〔資料８〕安富了心軍忠状			武朝	弘和元（1381）年、本城落城。
	永徳元年９月12日		菊池館城	〔資料７〕深堀時弘軍忠状					Ⅱ期		
15世紀									Ⅲ期	持朝	元中９（192）年、南北合一。

第１表　菊之城、守山城の変遷過程想定図

ことはできない。

〔資料四〕では「菊地本城」とは別に「隈府城」が記されている。康歴五（一三七九）年の〔資料九〕でも「陣の城」と「くま目（部）城」が分けて記され、永徳元（一三八一）年の〔資料六・七〕でも同様に、それぞれ「菊地陣城」「菊地館城」が「隈府城」とは分けて記述されている。〔資料七〕の「菊地館城」の記述から、居館的な機能をもった可能性があるが、これが依然「菊之城」を示すのかどうかは文献からは判断できない。しかしこの時点でまだ本城が移転していないとすると、武政の時代に移ったとする〔資料一～三〕の通説とは矛盾する。さらに永徳元（一三八一）年の〔資料六～八〕では惣領武朝が「守山城（隈府城、熊耳城）」にたてこもっているが、落城後、肥後中部の宇土城へ逃れて、元中九（一三九二）年の南北合一まで菊池へもどることはなかったことから、本城機能がこの時点で深川の「菊之城」から隈府の「守山城」に移っていたと思われる。ただし両者の性格は異なるものと考えなければならない。通説では十六代武政の代に移転したと伝えられるが、この本城移転が正平年間から永徳年間の間、すなわち十四世紀第3四半期であったと仮定すれば通説とは矛盾しない。

さらに土井ノ外遺跡は、本城が移転したと推測されるこの時期、十四世紀後半から末にかけて築かれた居館跡と考えられる。この居館が惣領屋敷であったかどうかは現時点では判断できないが、この時期に本城直下に居館が存在したことは注目したい。さらに現在の街並に通ずる区画を持っていたことは、隈府一帯が一族の本拠として、すでに整備されはじめていたことを示すと思われる。

永徳元年の「守山城」陥落により、総領の武朝が菊池を追われるが、その後おそらくは九州における武家方勢力の伸長を抑制するためであろうが、本領を安堵され菊池へもどっている（阿蘇品二〇〇三）。土井ノ外遺跡が本城陥落によって途絶せずに十五世紀前半まで存続したことは、そのことに関連するのかもしれない。長門・周防国守護職大内氏の「山口」や、越前国守護代朝倉氏の「一乗谷」に代表されるように、守護町は守護館を中心として形成される。菊池氏も代々肥後国守護をつとめており、隈府一帯もその機能をもって発展していったと考えられる。

【五】おわりに

菊池における中世城館について、これまで判明している文献資料と近年の発掘調査事例の再整理をおこなってみた。気がつかされたのは資料の少なさであり、限られた中で当時の様相を推測しなければならないことであった。既存の文献資料は、近世から多くの先学たちによって網羅され考証がなされているが、これ以上の増加はむずかしいと思われ、発掘調査による考古学的検証の必要性を痛感した。しかし発掘調査によって得られる情報は、主に遺跡の最終段階のものであり、それ以前に消失したものを実証することは困難である。このように両者から得られる情報には制限があり、補完しつつの検討が必要であろう。

本稿はこれらの資料をもとに菊池の中世城館の再検討をこころみたものであるが、結果としてはこれまでの先学の研究成果を羅列するにとどまってしまった。これはひとえに筆者の力量不足によるものである。しかし現在判明している資料を提示することによって、菊池の城館に関する現状と問題点を整理することはできたと思う。特に発掘調査の二例の成果を資料としてあげることができたのは、意義があると考える。

近年の研究によれば、中世の城館はさまざまな社会様相を背景に存在し、その概念は多様化しており、もはや軍事拠点として単純にとらえる

ことはできなくなっている。進展をとげる中世城館の研究の中で、どのように肥後国菊池を位置づけていくか、今後より一層の検証をすすめていきたい。本稿については未熟、不見識の部分も多々あると思うが、読者諸賢にはご一読いただき、ご意見ご批判をいただければ幸いである。

本稿を執筆するにあたり「菊之城」出土土器について、美濃口雅朗、坂本憲昭両氏のご教示をいただいた。記して謝意を表します。

【参考・引用文献】

（論文等）
青木勝士　「肥後菊池氏の守護町「隈府」の成立」『熊本史学』第七二・七三合併号：pp. 一―一三　一九九六
阿蘇品保夫　「菊地一族史の再検討」『乱世を駆けた武士たち』熊本歴史叢書3：pp. 五―四一　二〇〇三
大分市教育委員・中世都市研究会編　『南蛮都市・豊後府内　都市と交易』二〇〇一
大田幸博　「菊池十八外城」菊池高齢者大学講演資料　二〇一一
菊池市史編さん委員会編　『菊池市史』上巻　一九八二
齋藤慎一　『中世武士の城』吉川弘文館　二〇〇六
渋江公正　『菊池風土記』『肥後文献叢書』第五巻　一九一〇
竹内理三・花岡興輝・杉本尚雄・工藤敬一編　『熊本懸史料』中世編　第五　一九六六
東京大学史料編纂所編　『大日本古文書』家わけ一三　㈶東京大学出版会　一九三二
中井　均　「中世の居館・寺そして村落―西国を中心として―」『中世の城と考古学』新人物往来社：pp. 四〇四―四四〇　一九九一
森本一瑞輯（横田氏敦校正）『古城考』巻下『肥後文献叢書』第三巻　一九〇九
森本一瑞纂（水島貫之校補）『肥後國誌』巻之六　一九一六
（報告書等）
菊池市教育委員会編　『史跡菊之城跡確認調査概要報告』（未公開資料）二〇一二
熊本県教育委員会編　『熊本県遺跡地図』　一九九四
熊本県教育委員会編　『二本木前遺跡』熊本県埋蔵文化財発掘調査報告第一六七集　一九九八
熊本県教育委員会編　『祇園遺跡』熊本県埋蔵文化財発掘調査報告第一八八集　二〇〇〇
熊本県教育委員会編　『隈府土井ノ外遺跡』熊本県埋蔵文化財発掘調査報告第二四八集　二〇〇九
熊本県文化財保護協会編　『熊本県の中世城跡』熊本県埋蔵文化財発掘調査報告第三〇集　一九七八

【挿図出典】

第一図　菊池市役所刊に加筆補正
第二図　熊本県教育委員会編（二〇〇九）
第三図　熊本県教育委員会編（二〇〇九）に加筆補正
第四図　菊池市教育委員会編（二〇一二）に加筆補正（未公開資料）
第五図　菊池市教育委員会編（二〇一二）に加筆補正（未公開資料）
第六図　阿南実測（未公開資料：菊池市教育委員会収蔵）